

ふるさと御所 歴史探訪

木綿作と大和緋

〈2〉

先月号では、田地に木綿を植える「田方綿作」について述べ、その割合は、平均約35%であると説明しました。御所地域で作られた木綿は、「大和緋」に加工され、各地に出荷されてきました。緋には、白緋と紺緋があります。それぞれの写真を写真1と写真2、拡大

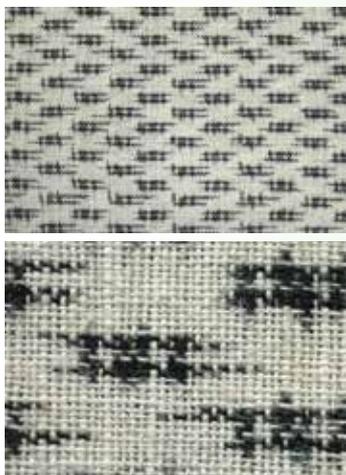
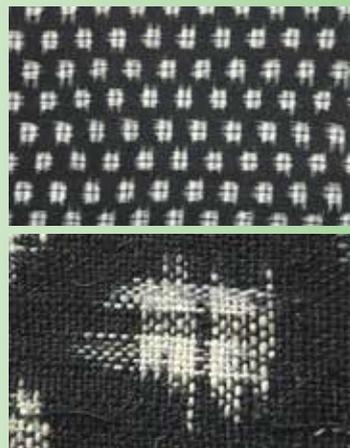


写真1

写真3

写真2

写真4



を写真3と写真4に示します。拡大写真を見ると、糸の太さが一定していません。手で紡がれたものだからです。また、経も緯も染まっているところと、染まっていないところがあることがわかります。このように、緋は部分的に糸を染め、それを織って模様にするのです。

先月号で、緋のことを「飛白」とも書くといいましたが、これは織り上げた布地に白い斑点がある状態を表すということです。したがって、紺緋を意味することになります。紺緋の場合、総糸の一部を糸で巻いて糊で固めて染まらないようにするのが特徴です。全国的には、紺緋が多かったようです。

大和緋の特徴は、白緋であることとされています。これは板締の発明によりますが、板で挟むことによって、染まらない部分を大きくすることができるようです。『大和御所町誌』には、明治33年(1900)に御所町の植田忠四郎氏が「板締緋製造法」を新案特許にしたと書かれています。

もう一つの大和緋の特徴は、高機を用いることです。高機は経が斜めに設置されており、緋の模様合わせが容易であるということです。

大和緋の創始者とされている浅田松堂は、御所町では歴史上の重要人物とされています。その全体像について、『南葛城郡誌』、『大和御所町誌』、『御所市史』および木村博一氏の『近世大和地方史研究』に書かれています。

松堂は号で、本名は「新七」です。正徳元年(1711)に生まれ、安永6年(1777)に67歳(数え年)で亡くなったとされています。宝暦2年(1752)の宗門改帳の一部を写真5に示します。書かれている概要は、

新七は、年が42歳で、浄土真宗円照寺旦那、妻の「こさん」は、年が36歳で忍海郡忍海村新町の六兵衛の娘、俵の亀松は、年が6歳、娘の「いち」が21歳ということとです。この4人のほかに、娘が3人、下男が2人、下女が2人の計11人の名前が書かれています。

松堂が大和緋を創始したとされているのは、子孫のために書き残した「家用遺言集」のなかに記載があるからです。これは、宝暦12年(1762)に松堂52歳(数え年)のときに書いたもので、全部で108丁(216頁)ということとです。前述の木村氏の本に翻刻が掲載されています(市立図書館所蔵)。その内容を現代語に直すと左記のようになります。

木綿に「かすり」を織る事は、私がかねて伊勢の松阪の木綿「かすり」から考え出して、ゆくゆくは、当所の産物にしようと思う。私の子孫は、このことを忘れないようにしなさい。

この記述以外に、大和緋の創始に関する史料はないようです。緋には、いろいろの工程がありますが、松堂は具体的に何をしたらかはわかりません。しかし、この記述から大和緋は宝暦期に始まったことがわかります。江戸時代

から明治にかけて、有名であった久留米緋(福岡県)、伊予緋(愛媛県)、備後緋(広島県)は、いずれも始まりは、寛政期(1790)以降とされています。



写真5

(文責 中井陽一)